第 27 回森林と市民を結ぶ全国の集い 2023

続・森は誰のもの？

～森林コモンズを活かす明日へ～

報告書

■2023 年 6 月 10 日（土）14:00～6 月 11 日（日）

オンライン配信＋6 月 10 日（土）のみ会場（国立オリンピック記念青少年総合センター）

■主　催

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」実行委員会

公益社団法人国土緑化推進機構

実行委員長：内山 節（哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

■後　援

日本林業協会、全国森林組合連合会、全国木材組合連合会、全国市長会、全国知事会、全国町村会、森林づくり全国推進会議、林野庁

■事務局

NPO 法人森づくりフォーラム

目　　次

■ 開催趣旨・日程・プログラム概要.....3

■ プログラムレポート.....6

■ 参加実績・参加者アンケート 22

■ これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」 28

■ 「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」実行委員 スタッフ名簿..... 30

開催趣旨・日程・プログラム概要

■開催趣旨

森林は、私たちを含めすべての生物にとってかけがえのない存在です。
森林を守り活かしていく。それは、私たち共通の願いです。
そのためには、さまざまな人々が協働し、森林を「コモンズ」として強く意識していく必要があります。
コモンズとは、共有する資源や価値のことです。
今回の「森林と市民を結ぶ全国の集い」には、ふたつの目的があります。

１．森林コモンズのリテラシー・知見を共有する。

さまざまなセクターが協働していくにためにはコミュニケーションが大切です。
「集い」では、そのコミュニケーションの基礎となる知識やリテラシーを共有し、森林コモンズの歴史やさまざまな取り組みを学びます。

２．森づくりへの参加・協働のきっかけをつくる。

市民参加の森づくりを行っている人々の森林コモンズへの思いや展望などを聞き、ネットワークづくりや交流を行います。
「森林コモンズ」をキーワードとして、森林と市民、市民と市民とが出会い、新たなかかわりを育んでいく。そのことにより、森林も私たちの社会もより豊かになっていくはずです。

■日程

実施日時	プログラム名
6 月 10 日（土）14:10～15:30	講演
6 月 10 日（土）16:00～18:00	分科会 1
6 月 11 日（日）10:00～12:00	分科会 2
6 月 11 日（日）13:00～14:30	分科会 3）
6 月 11 日（日）15:00～16:00	クロージングセッション

■参加費

項目	料金	参加形態
一般（早割）	1,000 円	オンライン配信/会場参加/アーカイブ
一般（通常）	1,500 円	オンライン配信/会場参加/アーカイブ
学生	500 円	オンライン配信/会場参加/アーカイブ
応援・協賛	3,000 円	オンライン配信/会場参加/アーカイブ
アーカイブ視聴	1,000 円	アーカイブ視聴のみ

※応援・協賛金の一部は「緑の募金」に充当

■プログラム一覧（出演者 敬称略）

◇オープニングセッション　6 月 10 日（土）14:00～14:10

主催者挨拶	内山 節（実行委員長／哲学者） 沖 修司（公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事）
来賓挨拶	安高 志穂（林野庁 森林利用課山村振興・緑化推進室長）
趣旨説明とスケジュール 紹介	鹿住 貴之（副実行委員長／（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長））
司会・進行	石山 恵子（遊学の道 project 代表）

◇講演　6 月 10 日（土）14:10～15:30

・斎藤　幸平（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

『人新世における森林コモンズの可能性』

・内山　節（哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

『日本の多様な森のあり方と森林コモンズ』

◇分科会 1　6 月 10 日（土）16:00～18:00

＜わたしたちの森林コモンズを語り合おう！＞

話題提供	千葉 和（NPO 法人遠野エコネット　代表理事） 中越 信和（NPO 法人ひろしま人と樹の会 理事長） 平賀 裕子（伊那市ミドリナ委員会　副委員長）
コーディネーター	大石 淳平（認定 NPO 法人時ノ寿の森クラブ　事務局長）

◇交流会 6 月 10 日（土）18:30〜20:00

会場：カフェ・フレンズ（国立オリンピック記念青少年総合センター内）

※会場参加者のみ

◇分科会 2 6 月 11 日（日）10:00〜12:00

＜所有と利用から考えてみよう！ 森林コモンズのこれまでとこれから＞

話題提供	國岡 将平（合同会社 MANABIYA 代表社員/鳥取県智頭町地域林政アドバイザー） 五十嵐 敬喜（弁護士/法政大学名誉教授） 森田 秀之（地域プロジェクトマネージャー/株式会社マナビノタネ）
コーディネーター	赤池 円（私の森.jp 編集長）

◇分科会 3 6 月 11 日（日）13:00〜14:30

＜歴史・文化から探ってみよう！森林コモンズのこれまでとこれから＞

話題提供	渡辺 尚志（一橋大学名誉教授/松戸市博物館館長）
コーディネーター	小野 なぎさ（一般社団法人 森と未来 代表理事） 水谷 伸吉（一般社団法人 モア・トゥリーズ 事務局長） 矢島 万理（公益社団法人 国土緑化推進機構）

◇クロージングセッション 6 月 11 日（日）15:00〜16:00

＜森林コモンズを活かす・ 守っていくための具体的なアクションとは？＞

パネラー	分科会 1：坂本有希（一般財団法人地球・人間環境フォーラム／フェアウッド・パートナーズ） 分科会 2：國岡将平 分科会 3：矢島万理
コメンテーター	内山 節（哲学者／NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）
コーディネーター	鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長）

プログラムレポート

講演①『人新世時代の森林コモンズの可能性』

＜講演者＞斎藤 幸平

（写真 ©島本絵梨佳）

1987 年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。ベルリン・フンボルト大学哲学科博士課程修了。博士(哲学)。専門は経済思想、社会思想。Karl Marx's Ecosocialism:Capital, Nature, and the Unfinished Critique of Political Economy（邦訳『大洪水の前に』角川ソフィア文庫）によって権威ある「ドイッチャー記念賞」を日本人初、歴代最年少で受賞。同書は世界 9 カ国で翻訳刊行されている。近刊は『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた』（KADOKAWA）『ゼロからの『資本論』』（NHK 新書）。『人新世の「資本論」』（集英社新書）で「新書大賞 2021」受賞。

＜講演内容＞

人類が地球を根本的に変えるほどの力を持つ「人新世」において、コモンズを再生する方法について考えたい。特に今回は「森林と市民を結ぶ全国の集い」ということで、森林をコモンズとして再生・活用する方法について考えたい。森林問題の専門家ではないけれども、私自身も最近は森林関連の実践に取り組んでいます。

私達が直面している事態を表す「ポリクライシス」という言葉があります。これは「複合危機」と訳すことができます。例えば、コロナ禍においては、格差拡大と環境危機の問題が浮かび上がりました。このような大きな危機を前にして、私達が何をすればいいかは非常に難しい問題です。

私は気候変動デモに参加していますが、日本では規模が小さく、気候変動対策をリードする形にはなっていません。SDGs という名のもとで環境に優しいものを使おうという動きが出てきていますが、社会のあり方が大きく変わったかというと、ほとんど変化はありませんでした。SDGs はむしろ有害でさえあるのではないかと思うようになりました。

売り上げの 1%を環境保全団体などに寄付するような企業が、SDGs を宣伝・PR の道具として使い、消費者もそれで少し良いことができると思って積極的に買って応援する形で、企業にとっても消費者にとっても、今まで通りの生活を続けるための免罪符になってしまっています。

私達は非常に大きな分岐点にいて、気候変動もこのままいけば 5 年ぐらいで 1.5 度を超えてしまうと言われています。1.5 度を超えるのを避けることはほぼ不可能だと思っています。そうした中で、分断や格差を深める社会に向かっていくのか、それとも誰もが公正で最低限の生活が保証されるような社会を作っていけるのか。

このような分岐点に差しかかっている時に、現実においては、東京都の明治神宮外苑の森が再開発される問題があります。これは資本主義が暴走して私達の社会の富を破壊することの一例です。資本主義は資本を増やして利潤を獲得することが目

的です。人新世の時代は、ありとあらゆるものが資本主義に追われて商品になってしまった時代です。資本を増やすために、使えるものや建物を無理やり壊して立て直したり、再開発したりすることが行われています。一部の企業が、市民の声を聞かずに決定していることが問題です。資本主義社会における環境の破壊や開発は、社会のウェルビーイングや持続可能性に寄与していません。

今後日本社会を資本主義の暴走から守っていくためには、市民が主体となって街のあり方を決めるプロジェクトを行うことが必要です。「ミュニシパリズム」と呼ばれる、自治体を自治主義で守っていく市民主体の取り組みがヨーロッパで出てきています。日本でも開発する企業主体ではなく、市民主導で社会を作っていこうという運動を広める必要があります。

ハーバード大学の研究者エリカ・チェノウェスが言ったことによると、3.5%の人たちが本気で立ち上がれば社会のあり方は大きく変わる可能性があるということです。日本全体でも再生可能エネルギーを増やしていく動きが出てきていますが、その進め方に問題があります。再エネ自体は進めていくしかないと思いますが、それを市民主導でやらなければいけません。

著者『僕は Uber で捻挫し、山でシカと戦い、水俣で泣いた』という本の中で、日本でも新しい取り組みがあることを取り上げています。その一つが「NEXT GREEN 但馬」という労働者協同組合の事例です。NEXT GREEN 但馬は持続可能な林業を目指して、働く人自らが経営計画と施業とに主体的に関わっていく林業を実践されています。その傍ら、森のようちえんのような環境教育的な取り組みもされています。

私は、「コモンフォレストジャパン」という一般社団法人を仲間と作り、みんなでお金を出して森を共同財産として購入し、管理や手入れをしながら生物多様性を豊かにして未来に残していこうという活動をはじめました。今年、東京都八王子市の裏高尾の方で 3.5 ヘクタールぐらいの土地を買いました。そこの森に月 1 回ぐらい行って、みんなで森の手入れをしたり、ワークショップをやったりしています。

私は「共事者」というあり方について考えています。「共事者」とは、「事柄を共にする者」という意味です。共時者性を持つことで、私たちが普段なかなか身近に感じられないような問題についても一緒に共に考え、学びながら新しいアクションを起こしていけるような社会のあり方に繋がっていくといいなというふうに思っています。

私自身も、森の問題について実際に当事者として関わっているわけではありませんが、一緒に関わっていくような「共事者」になることができています。これからの時代に、もっと自分たちが「共事者」として参加し、地域の自治に関わっていくことが重要だと考えています。

今後日本では、人口が急速に減っていく中で、自然が再野生化していくと思われます。私たち人間が生活する領域が減りますが、コンパクトな形のあり方に転換していくというのも、一つ脱成長的なあり方だと思います。それはみんなが山奥に住むとかいう話ではもちろんなくて、ある程度まとまって住むというのはエネルギー効率を考えても利便性が高い。

今の東京のようなあり方だと、市民が政治などに主体的に関わっていくのが難しい。都市が大きすぎるため、地域の繋がり合いやコミュニティも痩せ細っていく社会のあり方を見直し、適正規模の

社会規模に抑えていく。そうすることでコミュニティが活発化し、私たちがみんなで自治体の政治や政策に積極的に参加していく社会のあり方が実現できるんではないか、と考えています。
私たちは、これから自分たちが参加して地域の自治をしていく。そして資本の支配から自分たちの主導権を取り戻していく。そういう取り組みを、これからますますしていくことの重要性が高まっているのではないかと思っております。
そのときに「社会的共通資本」という考え方が大きな力になると思っています。

講演②
『日本の多様な森のあり方と森林コモンズ』
＜講演者＞内山 節
（哲学者/NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）

哲学者/NPO 法人森づくりフォーラム代表理事。1970 年代から東京と群馬県上野村の二重生活を続けながら、在野で存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思想を展開する。著書に『新・幸福論 近現代の次に来るもの』『森にかよう道』『「里」という思想』『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』など。2015 年冬に『内山節著作集』全 15 巻が刊行されている。

＜講演内容＞

森は多様です。そして、その多様性とは、森と人の関わりが多様であるということでもあります。私は群馬県上野村にも家があるのですが、上野村には山村的な森と人の関わりがあります。一方、東京に戻ってきたらまた違う関わり方になっていますし、同じ山村でも北海道から沖縄までさまざまな関わり方があります。

ですから、森そのものも多様ですし、森と人のかかわり方も多様だというのが、ひとつの前提としてあるような気がします。

山村の歴史を見ても、木材を利用するために森を管理していくという方法もありましたし、薪をいかに確保するかも大変に大事だった。炭焼きが広がっていく時代になりますと、炭焼きのための森も大事になってきます。それから関東地方では農業のために平地林をつくっていくことが重要になっています。森は木だけでなくて、そこで山菜を採ったりキノコを採るという利用もしていく。

こうして、いろいろ形で森と人は関わってきた。その歴史を踏まえて、今日における多様な森との関わり方はなんなのか、それをもう一度考えていく必要性が出てきたように思います。

ところで、今回のテーマは「森林コモンズ」です。コモンズとは、かつてのヨーロッパ、とくにイギリスを中心とした領主や地主などの権力も強く、権力に支配された村というのでしょうか、そういう中に共同利用を許されたような場所があった。それに対して日本の場合は、地域によっていろいろな共同利用がありました。入会林野は、形式上は領主の森という形にはなっているのですが、領主が支配しているわけではなく、「地元の方は、ご自由にお使いください」と、そんな感じになっているケースが多かった。

昔の生活は薪が重要ですから薪を採るための共有林が必要です。上野村ですと、村の 95%ぐらいが森林ですから「好きに薪をとっていいよ」という感じになってくる。一応取り決めはありますが、他人の山に行って取ってくる場合でも、落枝や枯れ木には所有権がないとされていました。

山菜やキノコの利用についても地域によってさまざまです。地域によっていろんな共有のあり方、あるいは入会のあり方があります。

それらをすべて「コモンズ」としてひとつの概念のようにしてしまうと、少し話がずれてしまうという気がします。

いろんな共有の形が何によって支えられてでき上がったのかというと、そこにはその地域の人たちが価値を共有していたということがあります。

かつては、山村地域には共有された価値観があって、それでみんなで村を守っていこうとしていた。共有の文化も精神世界もある。そういうものを前

提にして、そこに森の共有化というのも出てきている。
日本の森林所有権というのは、もともとは今と違って立木の所有権だけでした。
それ以外は、私のものもみんなのものというふうに開放していく。これは「総有」という言葉が妥当です。私のものであるけれど、みんなのものだという所有の仕方です。昔の森林所有では、ごく普通にあったといってよい形です。ただ、その時に「総有」の中に入っているメンバーは、昔は当然村人でした。
それが崩れてきたのは自動車で移動するようになってからです。つまりメンバー制の「総有・共有」だったものが、メンバーじゃない人にまで開放しなければならないということが発生してきた。
そうすると問題になってくるのは、「ルールを守ってください」という問題よりも、共有の基本になった「価値の共有」「精神の共有」「文化の共有」とか、それがない人たちに開放しなければいけないということです。それがトラブルを時に引き起こします。
外国の方が来てトラブルを起こしているケースはあまり聞いたことがなくて、むしろ価値を共有しない日本人がやってきて、それでトラブルを起こす方が圧倒的のようです。
ただ、どちらにしても我々は「新しい価値の共有」というものを確立しないと、みんなに開放することは難しい。
メンバーシップ的な共有ではなくもっと広い共有というものを考えるならば、その基礎にどういう価値を我々は共有できるのか。その問題について議論していかなければならないという気がしています。
たとえば「生物多様性を守ろう」という価値を共有しましょうといった場合、よくいわれるのが、里山が手入れしないで汚くなったのできれいに整理しましょうといったことです。すると、チョウもくるし花も咲くし生物多様になりました、そう一般的にはいいます。けれど、それは半分正しくて半分は嘘です。生物の中には微生物も含まれています。いろんな微生物を含めて生物種の多様性ということになると、実はその「汚い」という森の方が多様であったりする。腐った木がいっぱい転がっていてジャングルのようになっている。そこは微生物にとっては天国のような、非常に豊かな場所です。
ですから、よくいわれる「きれいに整理して生物種が多様になりました」というのは、目に見える生物は多様になっていて、それは我々に大変心地いい世界をつくってくれますが、全部を「きれい」にする必要はありません。

これから私たちは、なんらかの価値共有といったことをしていかなくはいけない。
それはたぶん、なんらかの精神世界の共有につながっていくわけです。そういうことがあってこそ、みんなのものだからみんなで使おう、という言い方ができていくのだろうと思います。

分科会１＜わたしたちの森林コモンズを語り合おう！＞

＜趣旨＞

現在全国に森づくり活動に取り組む団体は 4000 以上あるといわれている。多くの団体がボランティア活動から始まったが、今では参加スタイルや活動内容も多種多様に拡大している。そこで全国各地で活動する森づくり団体をパネリストに迎え、日々の活動で抱えている課題や今後の展望を共有してもらい、森林コモンズというキーワードを軸に森林ボランティア団体の価値と役割を確認し、可能性を考える。

①発表者の発言趣旨、印象に残った発言

1 中越 信和（NPO 法人ひろしま人と樹の会理事長）https://www.hitotokinokai.com/

1992 年に設立された老舗の森づくり団体。「森づくり」（目標林相を決めた森林整備）、「人づくり」（技術者と一般森林ボランティア）、「ボランティア精神醸成」（他団体との協働、市民参加イベント）の 3 つを活動目的とする。現在会員は 92 名だが、会員を増やすということではなく、別のグループを作ってもらうということで進めてきた。30 年を超える活動の中での若年層の森林・木材離れが大きな課題ととらえている。木育団体との連携で子どもからその大人に広げていくというプログラムに力を入れている。

2 千葉 和（NPO 法人遠野エコネット代表理事）http://tono-econet.org/

2004 年に任意団体として立ち上げ、平成 22 年に NPO 法人化した。会員数は 134 人。川柳川ごみ拾い、水源の森づくり、夏のエコキャンプやデイキャンプ、畑や田んぼでの活動など年間を通じた子供向けのプログラムを展開。最近では森の幼稚園を始めた。大人向けには薪づくりや木工、間伐作業など本格的な森に関わるものから、森を楽しむためのプログラムとしては森フェスやマルシェなども開催している。

3 平賀 裕子（伊那市ミドリナ委員会副委員長）https://midorina.jp/

長野県伊那市が策定した「伊那市 50 年の森ビジョン」（2016 年）を応援する団体として 2018 年に発足。伊那市の支援を受けている。運営は委員会形式で、芸術家、デザイナー、学生など多種多様な人材で構成され、林業関係者が少ないのが特徴。生活の隅々まで森（ソーシャルフォレストリー）が浸透している 50 年後の伊那市を実現するために、「森感度を育む」、「森の「快（かい）」と暮らす」をキーワードに、森を楽しむための様々な活動を展開している。

4 大石 淳平（NPO 法人時ノ寿の森クラブ事務局長）https://tokinosunomori.com/

1975 年に廃村となってしまった静岡県掛川市の倉間地区大沢集落跡で「ふるさとの森」を再生しようということで 1996 年に活動がスタート。①森で汗を流す人②森づくりを支援する人③森の恵みを利用する人と、誰もが多様な形で森づくりに参加できるようにしている。活動の成果として、多様な個人や団体が関わることのできる仕組みができたこと、また森林環境贈与税を活用する形で持続可能な保全管理を目指す事業がスタートできたことを挙げ、誰もが森と気軽に出会える場所、すなわち「森と人を結ぶプラットフォーム」づくりの基盤づくりに向けて今後も活動に取り組んでいく。

②ディスカッションで印象に残った発言

■森林は人間にとって欠かせないもの

酸素の供給、生物多様性の維持など森林の持つ機能がなければ、経済も社会成り立たないということを伝える役割が森林ボランティア団体にあるのではないか。

■「森は楽しい！」で市民と森をつなぐ

森を自分ごととして捉えている人が少なくなっていく中で、まず森に関心を持ってもらう、すなわち0（ゼロ）から1（イチ）にするためには「楽しい」という感覚を持ってもらうことから始める必要がある。いま森林ボランティア団体に求められているのはこの部分ではないか。

■森林ボランティア団体ができること・できないことを自覚する

流域管理で山のあるべき姿（生態、経済、文化）を描く（オーストリアなど欧州モデル）ことは行政や専門家が担うべき、そのうえで、森への思いを重ねていく活動によって市民と森をつなげるという役割がボランティア団体にあるのではないか。大きなビジョンを皆で共有して、足元の活動を進める必要がある。

③まとめや感想など

森づくり団体や森林ボランティア団体が抱える課題として、運営人材が集まらない、イベントやプログラムへの参加者を集めるのがうまくいかないといったことが挙げられるが、今回の登壇者の団体の事例からは、そのような課題を克服するポイントは、森や森づくりを「楽しむこと」であることが垣間見えた。「森と人を結ぶプラットフォーム」として森づくり団体の活躍がますます期待される。

＜報告者＞坂本 有希

（フェアウッド・パートナーズ/一般財団法人地球・人間環境フォーラム）

分科会 2＜所有と利用から考えてみよう！森林コモンズのこれまでとこれから＞

＜趣旨＞

森林コモンズを考える上で切り離すことのできない「土地の所有権」を中心に、森林や里山資源の活用実例や法制度を通じて現代、そしてこれからの総有・共有について考える

①発表者の発言趣旨、印象に残った発言

1 國岡 将平（合同会社 MANABIYA）

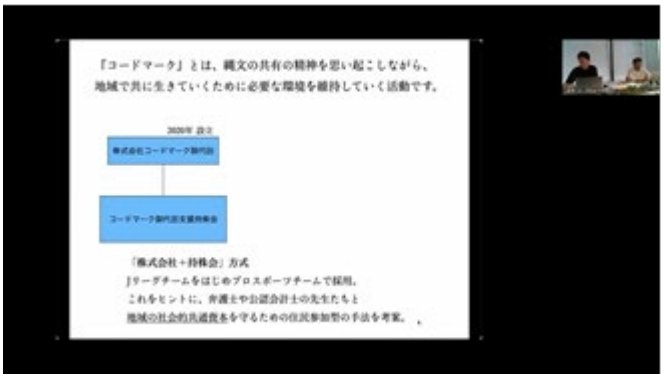
「所有を明確化することだけが正義ではなく、所有に余白を生み出していく事も重要」というコメントと共に、鳥取県智頭町の住民自治と森林コモンズの実例を紹介。住民自治制度については、集落単位の「1/0 村おこし運動」、地区単位の「地区振興協議会」、町全体の取り組みとして直接民主制である「智頭町百人委員会」を紹介しつつ、森林コモンズの実例としては、私有林を活用した「山林バンク制度」、財産区有林を活用する「芦津集落」、町有林を活用した人材育成団体「智頭ノ森ノ学ビ舎」の取り組み等、様々なプレイヤーとフィールド毎に特色ある実践事例が紹介された。

2 五十嵐 敬喜（弁護士/法政大学名誉教授）

本来は生活や生産の場であったはずの土地が、高度経済成長以降に商品化され、少子・高齢化が進む現代においては不明土地や空き家問題、都市でのマンション荒廃等、様々な問題を生み出しており、個人の絶対的所有権の限界を指摘。江戸時代から現代までの入会権や土地の利用形態の変遷に触れつつ、「分断社会」が生み出す様々な社会的病の治療薬として、森林が持つ力とそれを有効活用する為の「現代総有」を提唱。具体的な施策としてランドバンク（森林バンク）構想と財源として森林環境譲与税の活用を提言した。

3 森田 秀之（株式会社マナビノタネ）

「本来自然と共存、共生しながら生きてきた日本人には山の恵みや万物を大切に思い、共有の場を愛するといった文化的遺伝子がある」、長野県に移住した森田さんは前述のコメントと共に、地域の社会的共通資本を守るための住民参加型の手法の実践事例として、J リーグをはじめ多くのプロスポーツチームで採用される「株式会社＋持株会」方式を紹介。現代の場づくりとその運営には、かつての神社のように、人が集まり、自然観や社会観、死生観を身体を通して感じることができ、祈りが生まれるような「風土自治」の概念が必要だと提言。



②ディスカッションで印象に残った発言、Q&A など

五十嵐：人口が増え、物事が大きくなっていく時に、ほとんどの法律や制度は作られてきた。これから世界でも例を見ない規模、スピードで人口減少を迎える日本は、あらゆる概念を変え、対応していかなければならない。大都市を解体しながら、それぞれの文化的アイデンティティを持つ新たな

都市づくり、空間利用をしていく必要がある。その時に森林はその地域の最も重要な価値となっていき、長いスパンで日本を森の国に変えていく必要がある。

③まとめや感想など

医学の父、ヒポクラテスは「人は自然から離れると健康からも離れる」という言葉をのこした。客観的に見ると現代社会はもう手遅れと言える程、分断を生み出しながら、自然から離れ、環境や生態系を破壊し続けているのかもしれない。それでも少なからず、各地・各分野で目の前の森林や未来と向き合い、独自のアイデアと暫定的な手法を組み合わせながら実践し続けるプレイヤーがいる。もし現代社会の問題が「分断」にあるならば、今回の分科会のように世代や立場を超えて様々な人が「繋がる事」「価値観を共有していく事」が大きな意味での日本社会の「自治」に繋がっていくのではないか。

＜報告者＞國岡 将平
（合同会社 MANABIYA）

分科会３＜歴史･文化から探ってみよう！森林コモンズのこれまでとこれから＞

＜趣旨＞

『江戸・明治 百姓たちの山争い裁判』を執筆された渡辺 尚志さんをお迎えし、かつて百姓が暮らしの中で森林をどう位置づけ、資源として管理してきたのかなどお話いただきます。それら歴史を踏まえ、私たちは今後、森林や森林空間とどのように向き合っていけばいいのか、聞き手役も加わり、森林コモンズの過去と未来について語り合います。

①発表者の発言趣旨、印象に残った発言

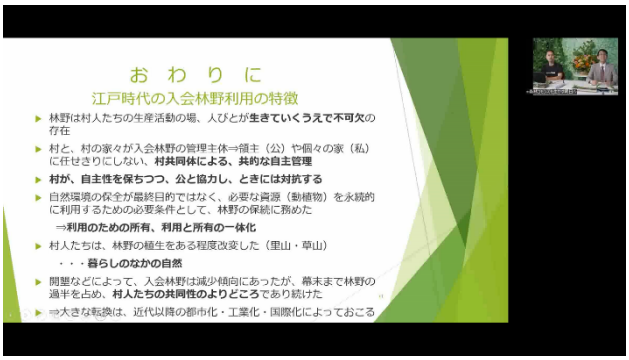
１江戸時代の総人口の 8 割は百姓身分であり、百姓たちの居住空間は「村」という共同体であった。村で暮らす人々にとって林野は肥料、燃料、食料、用材を得ることができる貴重な存在であり、生きていくうえで不可欠なものであった。

村人が利用できるコモンズ（入会地）は、面積的にも江戸時代の森林の中核ともいえる存在であり、村による自主的な取り決め（村掟）によってさまざまな利用規制がかけられ、無秩序な利用による荒廃を防いでいた。

2 近隣の村との林野の境界（利用権）争いや水利権争いは、双方の村で暮らす人々にとって死活問題だった。

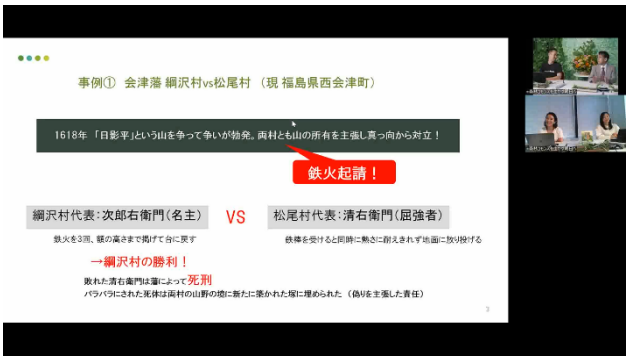
争いを解決する最終手段として、鉄火起請（焼けた鉄の棒を手で握り、無事に神様へ運べた者の主張が正当であるとするもの）などもしばしば行なわれた。また、室町時代に勃発した境界争いが 300 年も続いた地域もある。

このように、林野と水は人々の命綱ともいえる大変重要な存在であった。



②ディスカッションで印象に残った発言、Q&A など

私たちが関わる／関わろうとしている森林にはそれぞれに歴史がある。その来歴を知ることが、地域で暮らす人と外から入ってくる人が新たなコミュニティをつくる際のヒントになるかもしれない。なお各地に残る古文書には、来歴が記録されているケースも多々ある。もし古民家や蔵から古文書が見つかった場合は、処分せずに地元の博物館や行政にぜひ相談していただきたい。

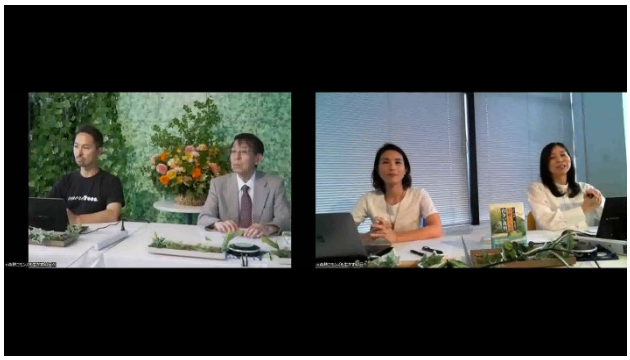


③まとめや感想など

江戸時代の人々にとって、資源を永続的に利用することが最終目的であり、自然環境の保全はあくまでその手段にすぎなかった。

今でこそ SDGs が取りざたされ、自然資本の持続可能性が注目されつつあるが、300～400 年以上前の江戸時代ではそれが既に当たり前のように実践されていた。森林コモンズの持続可能な管理や利用の手法を先人から学び、今に生きる私たちの山

林資源や空間利用の在り方について改めて考え直してみたい。



＜報告者＞水谷 伸吉
（一般社団法人 モア・トゥリーズ 事務局長）

クロージングセッション「森林コモンズを活かす・ 守っていくための具体的なアクションとは？」

＜趣旨＞

2 つの講演および 3 つの分科会を通して、今回のテーマ「続・森は誰のもの？～森林コモンズを活かす明日へ～」について、深めてきた。その議論を踏まえ、実行委員長と各分科会の担当者に登壇いただき、「森林コモンズを活かす・ 守っていくための具体的なアクションとは？」について議論した。

①分科会報告

分科会1「私たちの森林コモンズを語り合おう！」報告

坂本 有希（フェアウッド・パートナーズ／一般財団法人地球・人間環境フォーラム）

広い意味での森林ボランティア団体を運営する方々に登壇いただき、当事者として、森林ボランティアの役割と価値を確認し可能性を考えた。ポイントは以下の通り。

・森林ボランティア団体は「森と人を結ぶプラットフォーム」

・森林は人間にとって欠かせない存在であることを伝える

・「森は楽しい！」という感動で、森への思いを重ねていく

・森林ボランティアができること・できないことを自覚する

分科会 2「所有と利用から考えてみよう！森林コモンズのこれまでとこれから」

國岡 将平（合同会社 MANABIYA 代表社員／鳥取県智頭町地域林政アドバイザー）

全体のテーマ「森は誰のもの？」に、正面から向き合う内容だった。所有と利用は法律問題も関わってくるため、土地の所有権や利用に詳しい弁護士の方に登壇いただいた。ポイントは以下の通り。

・日本の絶対的所有権は森林に限らず大きな問題

・分断社会でますます重要となる「自治」

・1 つの解決策としての「持ち株会社＋持株会」方式

・都市からの森林活用のベクトルだけでなく、地方側の余白の作り方も重要

分科会 3「歴史・文化から探ってみよう！森林コモンズのこれまでとこれから」報告

矢島 万理（公益社団法人国土緑化推進機構）

森林コモンズを考えるにあたって、過去のことを知ろうと、『百姓たちの山争い裁判』の著者の方に登壇いただいた。ポイントは以下の通り。

・江戸時代の村人にとって、林野は生きていくうえで不可欠な存在。命綱！

・自然環境の保全は手段。資源(動植物)を永続的に利用するために林野の保続に務めた。

・関わる森林の来歴を知ることが、地域の人と外から入ってくる人が新たなコミュニティをつくる際のヒントになるかも！

②所有と利用についてあらためて考えたこと

坂本：所有者個人の経済的な価値も必要だと思うが、それよりも、みんなが共有できる価値を、子どもの頃から認識できるようになってほしいと思っている。

國岡：大切なのは、その山に責任を持って関わり続ける意識。企業もお金を出すよりも責任を負ってもらえる方が嬉しい。また、所有権は強すぎて仕方ないが、利用権がより重要。モラルある利用がされれば、持続的に使えると思う。利用するリテラシーを高めてほしい。

矢島：江戸時代は利用と所有が一体化していた。今はそれが離れているのが大きい。所有者はメリットを望むと思うが、利用者は勝手に使うのでは

なく、所有者ときちんと話をすることが大事だと思う。

③所有者と利用者が、価値や責任を共有するためには、どうしたらよいのか？

矢島：所有者と利用者をつなぐ存在が大事。互いが言うことを同じ土俵に上げるような人がいることで、共有できると思う。その役割を担うのが、いろんなタイプがあるだろうが、まさに今回の参加者かもしれない。

國岡：主語を整えることが重要。これからは環境に貢献する時代と考えた時に、様々な協力関係者それぞれを主語に話すのではなく、山や水など自然を主語で話し合う。話がずれにくく、前向きに話せる気がする。

坂本：利用者が、自分ごととして、かけがえのない森をつくることが大切。都会に住む立場としては、都市住民に、自分にとって大切な場所、森をどう広げて行くかが重要だと思う。

④参加と自治、森林ボランティアについて

坂本：自然に支えられている自分達の暮らしを自分達の手で、というのが自治だと思う。都会では支えられている意識もなく、自然とのつながりを意識できるかは社会としても大きな課題。その意味でも、森林ボランティアには大きな期待がある。

國岡：大学生が楽しそうに山に入っているが、ボランティアというよりも、関わりたいから関わっている。企業との連携はパートナーシップ。ボランティアは、「外」のような感じがするが、もっと「関わりしろ」があると思う。ボランティアの先を考えたい。

矢島：森林ボランティア団体は、自分の活動や地域に対して誇りを持って活動していると思うが、その地域、その団体らしさを掘り下げて、外に発信して行くことが大切。いいところや課題を共有することで、仲間を増やすことにもつながる。

⑤内山節実行委員長よりまとめ

日本の社会は、考え方、村のあり方、仕事の仕方など江戸時代に一つの形をつくり上げた。明治以降、それを壊してきたが、今は壊したことによる問題点が目につく。どう修復するかが課題。日本の伝統的な発想では、社会は自然と人間が結び合ってつくっていた。人間には亡くなった人達も含まれ、さらに、神仏がいた。自然と生者と死者と神仏が結び合って、社会をつくっているという社会基盤をもう一度見直しながら、現代的な形を考えることが必要ではないか。人間だけで威張り、お金だけが威張っている。

所有権も捨ててもいいのではないか。昔は家を造る際、必ず地鎮祭を行ったが、許可を土地の神様に求めた。私達は使わせてもらうという、今でいう所有権で、一種の利用権に過ぎない。都市の不動産を含めて所有権はなく、自然から拝借して生きているという形に戻すべきではないか。

自治の話があったが、都市は都市だけ、田舎も田舎だけでは完結できない。これからの生活の仕方として、都市で暮らしていても、農山村に拠点を持つことは、個人としても、企業としてもよいだろう。そのような方向に向かいつつあるが、そこに行く過程でボランティアがいろいろなつなぎをしている。

いつの日か、都市と森林とか農山村をつなぐボランティア団体がないような社会がよいのではないか。都市と農山村に両足を持っている暮らしが普通になった時、そうなるのだろう。ただ、まだ時間はかかるので、ボランティアの役割はしばらく多い。伝統的なものを学び直して、現代的にどう作り変えるかが問われている時代だと思う。

＜報告者＞鹿住 貴之
（認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・事務局長）

感想共有ボード

6/10（土）講演プログラム①

斎藤　幸平さん
『人新世における森林コモンズの可能性』

人新世

ポリクライシス

＊ポリ：複数の・複合的な。
コロナの影響：自然災害、環境問題、経済問題、政治問題がさまざまな危機を起こしていること。

SDGsは大衆のアヘンである。

マイボトルやマイバックはやって満足しているの。
バングラディッシュなどで起こっている現状は見えていない。

企業のPRなどになっている。

オリンピックの汚職問題

神宮外苑の森の話

東京に残った森を破壊してまで資本主義のあり方はこれで良いのか？

ありとあらゆるものが商品にされる時代＝資本主義の時代
破壊や囲い込みで資本を増やしていく。

社会にとっての富：公共施設や自然

すでにある、使えるものを、新しく高級なものに変えていく、社会の富を破壊している状態。

短期的な視点になってしまっている。

市民のウェルビーイングを向上

森に触れることができる

公共のも、社会の富のを、市民が誰でもアクセスできるように。＝コミニズム（マルクス）

脱成長コミュニズム

社会の富を共有する

自分達の街をどうしていくのか？
＝企業に任せてはいけない。

【オンラインから質問】自伐型林業について分かるように説明して下さい。

経済を優先＜富の豊かさを優先

協同組合で林業

事例：NEXT GREEN 但馬

森のようちえん

ミュニシパリズム

高尾山3.5ha みんなで購入し管理

共時者（きょうじしゃ）

事柄を共にしていくこと：
当事者ではなくてもどのように関わっていくか。
↓
共に考え、学び、アクションにつなげていく。

市民営化

誰もがアクセスできるように民主的なやり方で管理していく

奥山や人口減少の激しい限界集落について

日本の自然が再野生化していく。よりコンパクトな形で成長していくように。エネルギー効率

適正規模な社会へ

3.5%の人たちが本気で立ち上がる

地域の自治に参加していく。

ある程度まとまって住む

再生エネと豊かな海・自然

開発という名の破壊

続・森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

6/10（土）講演プログラム②

内山節さん

森の多様性

森と人の多様性

村の在り方によっても森の扱いが違う。

「コモンズ」という言葉

落枝、枯れ木は所有権がない。
伐って良い木、伐ってはダメな木。
厳格な共有の管理がある村もある

地域のローカルルール

日本全国統一のルールはない。

【オンライン】クマタカの餌場、大規模伐採で増えているような気がします。本当は小規模伐採がいいですよね。

例：沖縄の林業

土壌の特質状、木を切ると山が崩れる。鱗状に木を切る。

使用価値、有用性

文化的な共有

価値の共有

薪を採るための森

領主の森

共有された価値観

共有された文化
共有された精神性
共有されたルール

価値の共有ができていない人への共有は？

メンバー制の共有＜メンバー以外の人への共有＜世界中への共有

質問：山で生活されている先生は、富と商品の交換として生活が成り立っていると思うが、精神世界の共有を共有する。斎藤さんの話の富と精神価値について。

小菅神社
https://www.iiyama-ouendan.net/weekend/yamabushi/

所有権　生きている立木

田んぼがないので、ツルを採る権利が守られた

価値共有をどうするか？

同じ体験をしていない人
海外の人

精神性の共有

使用価値や富は、評価ができない。
商品価値は価格や物量など評価ができる。
キャンプ場の利用などは、商品の交換価値上の計算。
価値を見出すような暮らし方、生き方、精神性を持っているか。

続・森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

6/10 分科会1＜私たちの森林コモンズを語り合おう！＞ 16:10~

NPO法人ひろしま人と樹の会 理事長
中越　信和 さん

＜団体の活動目的＞

森づくり　人づくり　ボランティア精神の醸成　若年層の教育

2023年、参加者の10%が森に入ればよい（目標達成）
活動は92名+4団体ほど。
人数は増やすのではなく、新しい活動を増やしてもらおうとしている。

認定NPO法人時ノ寿の森クラブ　事務局長
大石 淳平さん

森林ボランティア

多様な個人、団体の森と関われるしくみ

ゲストハウス森の駅　時ノ寿學校

特定非営利活動法人遠野エコネット 代表理事
千葉　和 さん

遠野・薪づくりプロジェクト　高齢者宅へ薪

ディスカッション

市民として森にかかわる意義
千葉　切り捨て間伐もったいない→薪に
キャンプ２０年以上
森にかえろう、森から学ぶ、守られている
森が無ければ生きれない

中越　植物の光合成・呼吸
豊富な生態系サービス
平賀さん　エネルギー、酸素、ミネラル
素晴らしい森があるよ　伝えたい

人と森をむすぶプラットフォーム

森林ボランティアの今後の可能性
森のようちえん　IUターンある
数を増やす　森に関わる機会増やす

違う価値を見出すのも役目

遠野市10年やって変わらない
※清和先生　多種共存の森
どういう森をつくるのか議論なかった
流域を専門の人が理解して経済もまわる。フォレスター、マイスターの公務員必要。（ボランティアに限りある）

手を入れるところ、そのまま
自然に任せるところ

伊那市ミドリナ委員会 副委員長
平賀　裕子 さん

たき火の日（なにもしなくてよい）

伊那市ミドリナ委員会『森と暮らしの手引き』
https://midorina.jp/news/1271/

森は楽しくなかったら人はこない。

市民の参加を促す方法
どうすれば議会がわるか？
市民がそういう政治家を目指す
若い世代、コモンズを目指すひといる

楽しい、うれしい、心地いい　がないと伝わらない
森の気持ちを考える

子供のころに触れる
所有者は背を向け、業者は儲かるときだけ
子供たちが森は楽しいと感じてくれたら２０年後は・・・

質問

所有者との関係は？どう思っているのか？
見本をつくると興味ある人くる
どういう森にするのか共有しておくこと大事

市町村の森ある　まずはそこから

大きなビジョンを共有すること大事

続・森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

6/11 分科会2＜所有と利用から考えてみよう！ 森林コモンズのこれまでとこれから＞ 10:00～

國岡 将平さん
（合同会社MANABIYA 代表社員/鳥取県智頭町地域林政アドバイザー）

智頭町の住民自治　1/0村お越し運動
地区振興協議会
智頭町百人委員会

私有林　山林バンク制度

村有林　芦津集落
地縁団体芦津区会
財産区　原木しいたけ

町有林　智頭ノ森ノ学ビ場
人を活かす山を創る
57ha森林施業、小規模、8→51名

五十嵐 敬喜さん（弁護士/法政大学名誉教授）

現代総有　桁違いに対策が遅れている
住居、森林も放置

日本：所有と利用が一体　絶対的所有権
放置されても文句を言えない
商品化、入会権・結、1966入会林野近代化法
私有林（私有林、旧財産区、新財産区林）と国有林

新しい仕掛け、森林バンク　森林、農地を仲介するランドバンク
斡旋→事業体（自治体、専門家、企業、市民）

森林環境税600億円

【参考】国土交通省_改正所有者不明土地法に関するガイドライン等を公表～改正所有者不明土地法が施行されます～
https://www.mlit.go.jp/report/press/tochi_fudousan_kensetsugyo02_hh_000001_00049.html

土地は誰のものか~人口減少時代の所有と利用~https://www.iwanami.co.jp/book/b599122.html

Q.所有者不明の森林は、民法上の事務管理をテコに公的管理をもっと加速できないでしょうか？
A.人口が1/3になる。空間の利用が変わる。それぞれ文化的アイデンティティをもつ集落、森林と農業のあり方がかわってくるのではないか。国有化、社会主義は失敗している。

森田 秀之さん
（地域プロジェクトマネージャー/株式会社マナビノタネ）

地球はずいぶん前に地獄の門をくぐっている
異常気象
エネルギー
食糧難

米をつくる

2009米づくり2010稲作塾

薪づくり
広葉樹の森
伐採から薪
里山を守る 拠点

自治

カフェ　米、みそ、大豆
できるだけ村の中　楽しむ
竹かご、揮、コンサート

縄文　共有はじまる

コードマーク御代田　株式会社＋持株会
里山環境まもる
持株会：配当や議決権なし

山を買うとどうなる？

山伏

風土自治

自然と人
神社ではないか
神社的なもの→図書館、空き店舗、休耕田・・・

どう価値を共有していくか
ゆるやかに共有していくネットワーク

Q.コードマークの仕組みは素晴らしい工夫だと思います。無配当とのことですが、例えば日本国債程度の微小なリターンでも投資家に返すことで、必ずしも森林への意識がそれほど高くない市民の参加により、大幅にスケールアップすることができる気もしますが、どう思われますか？
A.お金にしばられない。経験をするということがリターン。

Q.持株会の会員権は譲渡できますか（無償、有償）？

ディスカッション

コーディネーター
赤池 円さん（私の森.jp 編集長）

個人所有　人間中心主義→自然の在りようを含めて総有

共有　持ち分権、分割できる
所有権が絶対的に強い
空地：使わないときは第３者が使えるようにしなければならない
→借地権設定の制度
所有者に眠ってもらい地代を払う

総有　全体でしか決められない
入会権、温泉権、漁業権
総有のメンバーは村の人（知り合い）

法改正が必要ではないか

余白のつくり方　余白にどうアプローチするか
若い人たち　希望

潤沢
山側の人は受け入れられる余白
人は自然から離れると健康からも離れる
コモン　自分達ごとにしていく
フィーリングを持つ人を増やしてほしい

続・森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

6/11 分科会３＜歴史・ 文化から探ってみよう！森林コモンズのこれまでとこれから＞
13:00~

百姓たちの山争い裁判
https://www.soshisha.com/book_search/detail/1_2284.html

渡辺 尚志さん（一橋大学名誉教授/松戸市博物館館長）

林野と水は、人びとの命綱

江戸時代の村

行政単位
生産・ 生活上の共同体

林野

肥料・ 燃料・ 食料・ 建築用材
所有形態：御林、入会地、百姓持地

開放性と閉鎖性

村による林野利用の自主的コントロール

御林：下草・ 落ち葉・ 木の枝を採取できた
村人以外（狐師、木工）も入会地に入れた（要許可）
困窮した村人→山上り（生活を立て直す）

林野の閉鎖性…コモンズの悲劇を防ぐ
悲劇を防ぐための仕組み
・ 入会地は村人だけ
・ 村外者；許可を得た場合
・ 利用時期、用具、草木の量に制限
・ 罰則

林野の危機

17世紀：都市建設と耕地の拡大

19世紀後半：林産資源の需要拡大

常にある危機：肥料用草木の過剰摂取、利用権争い

→

御林の開放：部分林（ぶわけばやし）
耕地と林野のバランス
育成林業

国有林野に民間活力：部分林・ 委託林
育成林業

環境破壊：自主規制、購入肥料、割山、植林
利用権争い：ルール作り、仲裁・ 示談、裁判

生きていくうえで不可欠

村共同体による、共的な自主管理

永続的な利用のために保続

利用のための所有

ある程度改変（里山・草山）

共同性のよりどころ

近代以降の、都市化、国際化によって変化

会津藩 綱沢村vs松尾村

鉄火起請

近江国 小松村vs打下村

湯起請
300年続く争い

身体を張って決める

Q.文献が保管されていた場所はどんなところでしょう？寺？神社？
A.旧家の蔵、納戸。→現代は公的施設にアーカイブ。今でもお宅から出てくることある。
※古文書が出た場合は捨てないで

お宅や神社・ 寺に保管されている古文書重要であること伝えている。

コーディネーター・聞き手
小野 なぎささん（一般社団法人 森と未来 代表理事）
水谷 伸吉さん(一般社団法人 モア・ トゥリーズ 事務局長)
矢島 万理さん(公益社団法人 国土緑化推進機構)

Q.奥山の所有形態はどうだったのでしょうか？また、その割合はどれくらいだったのでしょうか？
A.統計資料はないが、奥山というものが広範にあった。奥山：草や木の枝を持ってくることができない。境界も引かれていないことが。争いを避けるため村境をグレーにしていた。

Q.村人が家を作る場合の木材の利用は、奥山の木を使ったりはできなかったのでしょうか？
A.どこの村の領域でもなく使うことは可能。しかし現実的には里山・ 集落から遠くないところから切り出すのが一般的。

Q.森に滞在する、通ることでもめたりは？
A.もめてるケースある。用もないのに入るはずない、シビアだった。

里山ボランティア@松戸市

古文書を整理して江戸時代はどうだったのか？
現在ある森林が先人たちの努力の賜物。
現在に加えて過去にも目を向ける。

小野さん：昔の人たちの思いがあり、今の森がある。どんな役割、存在、背景を知ることから。古文書さがしたい。

矢島さん：深く掘り下げる機会なかった。歴史のこと、ありがたい。コミュニティ、生きていく上で不可欠だったんだなぁ。新しく入る人、そこにいる人、つなぐ人、機会

最後に

渡辺さん：江戸時代の古文書がなくとも、明治・ 大正・ 昭和ならある。森林を守り活用していく上で、歴史を知ること大事。新しいコモンズ、新しいコミュニティづくり、村には開放的な側面があった、新たな関係づくりにヒントが。
森林の過去に関心をもっていただくことが、新たな共同体づくりに。

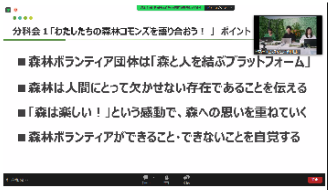
水谷さん：「自然環境を保護するのは、目的ではなく手段だった」今でいうSDGｓではないか。山林や水資源を永続的に使うこと、実践していた。

続・ 森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

6/11クロージングセッション　15:00-16:00
＜森林コモンズを活かす・ 守っていくための具体的なアクションとは？＞

パネラー 分科会1：坂本有希さん（一般財団法人地球・ 人間環境フォーラム / フェアウッド・ パートナーズ）
分科会2：植岡将平さん
分科会3：矢島万理さん
コーディネーター 曲住 貴之さん
（認定NPO法人 JUON(樹恩) NETWORK 理事・ 事務局長）
コメンテーター 内山 節さん
（哲学者 / NPO法人森づくりフォーラム代表理事）

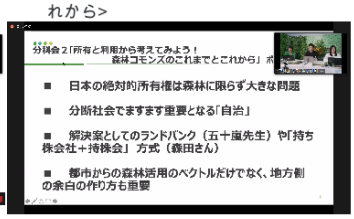
分科会１＜わたしたちの森林コモンズを語り合おう！＞



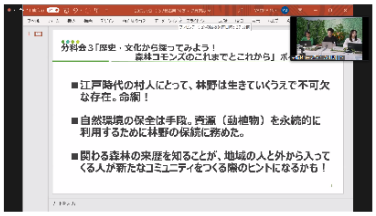
森林ボランティア27年間で277団体→4,000以上

昨年：社会的共通資本

分科会２
＜所有と利用から考えてみよう！ 森林コモンズのこれまでとこれから>



分科会3
＜歴史・ 文化から探ってみよう！森林コモンズのこれまでとこれから＞



所有権は絶対的に強い
利用権をしっかり上げていく。

所有と利用

利潤を求めてもいいんじゃないかな。関り続ける、責任を負うパートナーシップ

自治　参加

共通する価値を共有する

少しプラスになること必要？

積極的に行政が買い上げる事例

つなぐ役目 → ボランティア

森林の価値、今どういう位置づけか？

江戸時代：利用のための所有、一体化

所有者と利用方針を話していく

主語を自然寄りにして話す
この山は、水は、

内山節さん

江戸時代に一つの形をつくり、明治に壊してきた。いまどういう風に修復するのが課題。
伝統的なこと参考にしながら進める
人間だけの社会、お金の社会。
自然と人間、自然と生者と死者・ ご先祖様と神仏が結び合ってできている社会。
所有権は捨ててもいいんじゃないか。
産土神。自然から拝借して生きている。

都市は都市だけで完結しない。田舎も同じ。都市で暮らし、農村に拠点を持つというのも一つ。
森林と農山村つなぐボランティア　いりませんよという社会に

続・ 森は誰のもの？ ～森林コモンズを活かす明日へ～ 第27回 森林と市民を結ぶ全国の集い2023

参加実績・参加者アンケート

＜参加人数＞

日程	プログラム	視聴参加者 人数（最大同時視聴数）	うち、会場参加
6 月 10 日	講演	145 人	43 人
6 月 10 日	分科会 1	116 人	43 人
6 月 10 日	交流会	100 人	23 人
6 月 11 日	分科会 2	69 人	会場 11 人、控室 7 人
6 月 11 日	分科会 3	66 人	会場 10 人、控室 6 人
6 月 11 日	クロージングセッション	60 人	会場 12 人、控室 1 人
	合計	480 人	-

＜参加チケット申込数＞

種別	金額	申込み人数	うち、会場申込
一般（早割）	1,000 円	181 人	24 人
一般（通常）	1,500 円	56 人	5 人
学生	500 円	36 人	12 人
応援・協賛	3,000 円	14 人	1 人
合計		287 人	42 人

参加費合計金額：314,000 円（Peatix 販売手数料 42,944 円）

＜森づくり活動紹介キャンペーン＞

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」開催に合わせて、全国で活動する森づくり団体・プロジェクトの紹介キャンペーンを実施しました。WEB ページ、Facebook ページにて各団体の紹介記事を作成・投稿し、活動の認知を拡大しました。

【キャンペーン期間中の紹介団体・プロジェクト名】合計：8

NPO 法人山野草の里づくりの会（奈良県桜井市）、NPO 法人里山会公文名ファイブ（静岡県裾野市）、森と生きる（岐阜県恵那市）、多摩の森・大自然塾（東京都奥多摩町）、びわこ地球市民の森森づくりサポーター（滋賀県守山市）、認定 NPO 法人 JUON NETWORK、認定 NPO 法人山村塾（福岡県八女市黒木町）、認定 NPO 法人時ノ寿の森クラブ（静岡県掛川市倉真）

＜各プログラム参加後の感想＞

◇初日（6/10）

●印象に残ったこと

・森林経済に関して論理的な話の展開はあらためて考える機会になりました。

・実体験を伴ったお話は何よりの貴重なものです。

・森づくりの活動が具体的に示され、とても参考になった。

・今まで自分が持っていなかった視点からのお話で、勉強になりました。

・斎藤先生の森が経済や社会人、伝統とつながっているというお話や、外苑や公園の開発お話を聞いて、もっと広い視点で森を見ていけるようにならないとな感じました。

分科会では、実際に積極的に活動されているお話を聞いて、勇気をもらえましたし、いろんな活動をしれて良かったです。

・所有と利用についての議論はとても重要ですね。とはいえ結論が出るまで待つわけにもいかず……一方でやれることやるし、他方で議論をつづけるべきところは議論するし、といった感じでしょうか。このあたりのことを内山さんは「現象」と「本質」という言葉を使いながらよく話しています。

・分科会２のアンケートに答えたかったのですが、初日のものしか見つけられなかったので、こちらに書かせて頂きます。

・4 人の方とも興味深いお話でした。所有のついての課題がしれたとともに、みんなで所有物を使っていくことの重要性がわかりました。意見が偏った森の使い道は、未来にとって良くないものになりやすいけど、全会一致も難しい。多数決はその打開策なのかもしれませんが、どれにしても、みんなでみんなの思いを共有しながら、決めていく過程が最も大切なのかなと思いました。やり方ではなく、あり方が大切なのかなと感じました。

・「コモンズ」という言葉への疑問に、なるほどと思った。共有や総有と言っても在り方は多様であること。多様な人々が関わるようになった中での「価値の共有」ということについて、山林を含む所有する建物や土地を他にひらいていくに当たってより考えたいと思った。

・森林をいろいろな角度からとらえるヒントをいただけた。

・分科会では，日本の各地でほんとにいろいろな森林コモンズの取り組みがすでに実践されていることに驚きました。素晴らしいことだと思います。そして，それらの取り組みが，斎藤幸平さんのいう，脱成長コミュニズムへと繋がっているのではないかと感じました。一つ一つの取り組みは小さくとも，それが全国各地にもっともっと広まれば，脱成長に日本を向けていくことも不可能ではないかもしれないという希望が見えてくる気がします。そうなれば，内山節さんがいっておられた，共有の形態も新たに現れてくるのではないでしょうか。

・斎藤幸平さんの脱成長という概念にとても共感を覚える。また内山さんの話の、自然とともにある上野村の人たちの暮らしのありようが、これからの私たちの社会へのヒントがあると思う。

・ポリクライシスの時代において、どのようにコモンズを回復させるのか、実践する必要を学んだ。

●森林コモンズについて新たな気づきや発見

・森林コモンズの考え方は、何よりも次世代の子供達に植え付けていくことの重要性を、改めて感じました。

・もっと多くの人が森のことを考える必要があると思いました。

・頭が痛いことばかり<(_ _)>。

・皆様方の多様な活動は自分たちのそれの参考になりました。

・向き合っている方々の姿をかっこよく見せられる新しいアプローチがあったら、もっと参加を促せるかもしれないなと思いました。

・カタカナは意味を固定するのに時間がかかるので、少し理解できない部分がある。

・各流域にフォレスターがいるような未来になればいいなと思いました。また、人を集めるには「楽しい」「うれしい」「心地いい」が必要というのは常に胸にとどめておきたいと思います。
・特にありませんでした。
・森林は、地球のために守らないといけないもの！という固い思いがありましたが、地域や人に合わせて楽しさを持って共有するものという意識ができました。自分も周囲の人に楽しく気軽に興味を持ってもらえるような伝え方をしていきたいと思いました。
・「コモンズ」という言葉について。「価値の共有」ということについて。
・分科会での報告のような取り組みが，すでに日本各地にたくさんあるということを知りませんでした。
・はい、たくさんあります。私は外国人ですから、国で日本の森林コモンズについてインフォメーションが見つけにくいです。それで、参加することがとても有用なです。
・森林に関わる関係人口になりたいと改めて思った。

●ご意見・ご感想

・昨今各地に自伐型林業グループなど、様々な活動主体があります。今回のような集まりを生かし、全国の無数の団体が求めている仲間を募れる、もっと具体的な場にすることは出来ないでしょうか？行動できる人を増やすことが何より重要だと思います。対面にこだわらず、コロナのおかげで一般化した zoom 環境を生かせば、参加者が居住地域の近くに知らなかった活動団体を見出すきっかけになるかもしれません。そのためには Wi-Fi 環境の大幅改善は必要ですが。
・音声がもう少しクリアだとなお良かったです。どのように仲間が集まるのか、どのように広げていくのか。地域ごとに程度はあるだろうが、閉鎖的な地域での対処は、個人には限界があると思うこの頃。
・とても興味深かったです。
・中段の音声と映像の状況が悪くて残念でした。全体的に音声や画像があまり良くなく、内容に集中することができず残念だった。スライド等がない方も多く、余計に内容が理解しづらかった。
・録画なら仕事を休んでリアルタイムでオンラインで見る必要はなかったのにと残念です。そのあとのリアルタイム配信から見られたらよかったです。しかしリアルタイムはプツプツ音声もきれて聞き取りにくく、これでしたら後日動画配信のほうがよかったです。
・音声をちゃんとしてほしいです。資料だけ配られても、わからないことがあります。
・今回分科会１に参加された団体は、とても参考になる活動がいっぱいある。発表された資料がいただけるとありがたい。
・この度は、貴重なお話をありがとうございました。明日も楽しみにしております。
・市民参加やボランティアは重要ですが、当然限界があります。美しさや楽しさ、心地よさは、一般市民に目を向けてもらう上でもちろん大事な要素ですが、その森を保全・管理するためには過酷な労働があります。森林が社会の共通資本であることは当然のことですが、それを適切に管理するための労力やコストを誰がどのように担うのか、その具体的かつ現実論が聞きたかったです。
・大変貴重なお話を聞かせて頂きありがとうございました。普段は森と関係ないサラリーマンをしているので、オンラインでも開催して頂き大変ありがたかったです。
・来年以降もぜひ継続してください
・皆様は親切で歓迎にくれてありがとうございました～
・自然資源も商品として儲けの対象としかみない社会の中で、どのように森を守るかということはとても難しい。けれども、私個人としては人間も

生態系の中の一つの生き物に過ぎないのだといところから出発して、自然に対する畏敬を持ち、将来世代のために、今いる私たちがこれ以上地球を壊さないために、できることを考えていかなければいけないと思う。企業の利益優先の資本主義の中にあって、限界も感じるが、斎藤幸平さんのいう３.５％になって頑張りたい。実際には、都会の人間だし、年も年なので森での作業は困難かと思うが、関係人口として、今やっているブックマンション型の本屋で森に関する絵本をもっと並べたり、森と都会をつなぐための何かを始めたり、活動に参加したいと思います。

◇2 日目（6/11）

●印象に残ったこと

・コモンズと言われている部分が、少しわかったような気がした。特に「現代総有」という言葉にピンとくるものがあり、よくわかった。

・新しいコモンズの考え方を知ることができた。多面的利用と現在に至る課題が示されているから皆さましっかり行動なさっておられ、その思いと考えの深さに大いに刺激を受けました。

・現場で日頃から突き詰めて考え、実践し、また軌道修正し、という過程を繰り返している方々のお話は非常に深く思えたから。

・所有と利用、むらの管理、むらと村、江戸と昭和と令和等が整理できました。

・これから必要なことを、現場からお話いただけたこと。内山さんのクロージングでのお話。明治以前はご先祖様のことも、神様のことも、もっと生活に根差したものだった。農村部に暮らす祖父祖母の感覚はそれに近いと思っており、そう言う点からも人間の生活や考え方自体を本気で見直す時期だと思いました。

・森は人にとって生きる上で大切、ということと、保全の現場の状況を伺い、今後の森林里山保全活動の参考となった。

・＊SDGs はマヤク（？）であるという考え方、見方（同感なので）＊歴史から現在が生まれた経過を知ることが出来たが。＊林業従事者ならではの智頭町の在り方、興味深い。

●森林コモンズについて新たな気づきや発見

・共有と総有の明確化の指摘が、森林コモンズにつながると感じた。

・入会という言葉を今回はじめて聞きました。分科会 2 でやっと漢字がわかり、どんなものかイメージしやすくなりました。森のすべては所有者のものという認識でいましたが、利用はみんなで決めるべきだったり、余ったら分けあうなど、みんなで持つものだという認識に変わりました。服や家などのモノとは違う、自然だから都会の人も地方の人もみんなで持っていくものいう認識に変わりました。

・コードマーク御代田の取組

・閉鎖的な既存の組織との関係が築けないことには、絵に描いた餅で終わってしまうと思いました。湯起請、鉄火起請、負けた場合に殺されるルールなど、初めて知りショックでした。

・利用する方法を考えることで所有が成り立ち、森林が残せる。

・皆さんお話しされているように、今までの活動と地続きでありつつ、新しくアプローチが必要であると思いました。

・森林保全は人々、地域の状況に応じて保全した方がよく、関心を持つよう地域の人たちに森の楽しさを伝えること

・森林コモンズ：言葉、考え、認知度　　全くの素人で、まだまだ混沌。

●森林コモンズについて分からないことや、もっと知りたいこと

・古くからの住民との関係の作り方

・今回のテーマは、今までで一番良いテーマであると思いました。森林サービス産業という軽い発想とはまったく次元の異なる視点があるからです。
・江戸時代までに日本人が築いて来た価値観や仕組みが、現代においてはむしろ最先端であるという思いを改めて強くしました。一方、日本を取り巻く諸外国の大規模資本が、排出権取引やカーボンクレジットビジネスに乗って、おそらく日本の森林を狙っているのではという点で、こうした異なる哲学と価値観を持つ者に対しては、我々も油断することなく（コモンズという概念の持つ一種のフレンドリーさに甘えることなく）、ダブルスタンダードを用いて強面で戦わなければ、結局うまくやられるとも思います。（例えば水源林の買収等）どうやって戦うのが賢いのかについても、大切な日本の森を守る手段として、知りたいとも思いました。
・過去の議論やデータが知りたい
・都市部の人が、森林と夢見心地でなく関わっていくためにどうしたらいいかということ
・地域の人々が共有して育て楽しむ、実例とその推移（自分の合わせて、お互いの活動状況を共有し、双方の継続改善につながるとありがたい
・林業従事者の何パーセントがこの考えについて理解し現実に繋げて考えているのだろうか？不在・不明山主の放置林所有権という絶対的権利を自治体ごとの条例でなんとか出来るのだろうか？
・各地ですでに取り組まれている活動についてはよくわかりましたが，それらが森林コモンズであるのかどうかということについては，判断ができませんでした。わたしが，「森林コモンズ」とは何かということをちゃんと理解できていないからだとは思うのですが。

●新たに取り組んでみたいこと
・森づくりのビジョンを構築する仲間づくりが必要だと感じた。
・森林コモンズの適切な利用について、さらに実践的に学んで行きたいと思いました。
・持続可能な組織づくり（経済的な自立）
相手次第と思います。
・自分はいま学生で、実家の山林の施業を手伝っているに過ぎませんが、一刻も早くもっと積極的な行動を起こすことが、私の課題です。
・森林資源の活用
・改めて、森林や日本の歴史について学びたいと思いました。
・千葉の森林保全活動計画への反映
・森林コモンズへの活動に参加してみようと思っています。

●今後、「森林と市民を結ぶ全国の集い」で取り上げてほしいテーマ
・伊那市のような森のビジョン「2066 年浸透する森」のような事例をもっともっと知りたい。
・活動を持続可能にする取組
・「森林の防災機能」「林業を若者があこがれる仕事にするための知恵と工夫」
・森林と川、海の繋がり。木の分布と活用
・江戸時代の森林と人間の関わり方。都市部の人は、本当はどう森林と接していいのかただわからないだけのだと思います。
・市民と企業、ボランティアの先のパートナーとしての森林保全の取組み
・経済のみに支配されている現代人に、どの様に里山の価値を認めさせていくのか？
・東京などの都会に住んでいる人たちと森を結びつける試み
・森里海連環学、震災復興・海岸林の再生・防潮堤・・・。

●ご意見やご感想
・今回はとても具体的で、様々な事例があり、わかりやすかった。

・いろんな活動されている方のお話を聞くことで、いろんな角度から森林コモンズについて考える事ができて良かった。
・継続していってください。
・歴史資料を持っている財産区がどのくらいあるか、全国的に把握されることを望んでおります。
・はじめて参加させて頂きましたが、皆さまの見識の高さと覚悟に刺激を頂きました。ありがとうございました。
・内山さんに質問です。具体的にどうしたら所有権を撤廃させて利用権だけにできるのか、もし案をお持ちだったらお聞かせいただきたいです。すごい面白い発想だと思いますので。
・大変勉強になりました。今後、何らか関わり、お役に立てればと思います。
・本日は最後の方しか聞けませんでしたが、後日アーカイブを拝聴させていただきます。クロージングの音声は昨日より良かったです。貴重なお話をありがとうございました！
・このような機会を設けてくださり、ありがとうございます。対面での意見交換や森林保全の現場の状況踏まえた今後の取り組み方について、とても参考となりました。※折角頂戴した資料を懇親会後紛失してしまいました。申し訳ございません。
・第一分科会は、音声の聞き取りが正確にできず、退出しましたので、悪しからず。

これまでの「森林と市民を結ぶ全国の集い」

回	開催地	開催日程	開催テーマ
第１回	東京	1996/2/16～18	市民が支える森林づくり
第２回	東京	1997/3/1～2	「市民が支える森林づくり」の実現をめざして
第３回	大阪	1998/2/21～22	「市民が支える森林づくり」の新たな合意をめざして
第４回	宮城	1998/12/5～6	「市民が支える森林づくり」の新たな活動の広がりをめざして
第５回	高知	1999/8/19～22	山の中で考えよう！「みんなで支える森林づくり」 私たちがめざすべきものは何か
第６回	東京	2000/9/15～17	暮らしとともに築く森づくり
第７回	広島	2001/2/9～11	新世紀　森林づくり・地域づくり・人づくり －よりよき関わりを求めてー
第８回	群馬	2002/9/14～16	ともに森を治める社会をつくりだすために 森と人と未来のための群馬ビジョン
第９回	北海道	2003/11/1～4	地域に根ざした森林とのおつき合い 森林づくりの現在を理念から行動へ
第１０回	東京	2004/9/18～20	森とともに創るこれからの社会
第１１回	愛知	2005/8/26～28	森がうごく、人がうごく。そしてネットワークへ。 森と人との関係をさらに深める。
第１２回	大阪	2006/11/11～12	みんなが創る森づくり　森と共に生きる社会をめざして ～参加から協働へ～
第１３回	福岡	2008/3/8～9	暮らしにつながる森づくり
第１４回	東京	2009/12/5～6	今、あらためて問う「森林」の価値
第１５回	岐阜	2011/6/4～5	裏木曽の森を歩こう
第１６回	東京	2011/10/9～10	世界森林アクション・サミット
第１７回	島根	2012/11/2～4	神在月に集え！島根へ！～森林と木を活かす縁結び～
第１８回	東京	2014/3/22～23	暮らしとつなげる森林の恵み～都市の視点から考える
第１９回	福島	2015/6/12～14	東北復興に果たす森林の役割と市民活動
第２０回	東京	2016/6/11～6/12	温故知森～森と私たちとを結ぶ新たな道～
第２１回	京都	2017/6/10～6/11	伝統－森林－未来へ ～森林と関わる暮らしの歴史を学ぶ～
第２２回	東京	2018/6/16～6/17	変わりはじめた「山」・「ひと」・「街」 ～森の価値を分かちあう～
第２３回	静岡	2019/6/15～6/16	あなたの森林・里山との「関わりしろ」を考える
第２４回 【中止】	東京	2020/3/14～3/15	世界が取り組む SDGs を、私たちの森に活かす！ ～ともに学び、ともに歩む仲間をつくろう～

回	開催地	開催日程	開催テーマ
第 25 回	東京、岩手、宮城、福島	2021/3/7～14	「森林と市民を結ぶ」新たなカタチ ～東日本大震災から 10 年、コロナ禍のいま～
第 26 回	東京	2022/5/18～6/4	森は誰のもの？～森林コモンズを考える～

※第 25 回、第 26 回はオンライン開催

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」実行委員 スタッフ名簿

名前	所属・肩書	役割
内山 節	哲学者、NPO 法人森づくりフォーラム代表理事	実行委員長
鹿住 貴之	認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK 理事・事務局長	副実行委員長
赤池 円	私の森.jp 編集長	
大石 淳平	認定 NPO 法人 時ノ寿の森クラブ 事務局長	
小野 なぎさ	一般社団法人 森と未来 代表理事	
國岡 将平	合同会社 MANABIYA 代表社員/鳥取県智頭町地域林政アドバイザー	
後藤 洋一	NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会 事務局長	
小森 耕太	認定 NPO 法人 山村塾 代表理事	
坂本 有希	フェアウッド・パートナーズ、一般財団法人 地球・人間環境フォーラム	
水谷 伸吉	一般社団法人 モア・トゥリーズ 事務局長	
林 視	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部長	国土緑化推進機構
矢島 万理	公益社団法人 国土緑化推進機構 政策企画部	国土緑化推進機構
中島 大輔	自伐林家、NPO 法人 青梅林業研究グループ	監事
東 大介	林野庁 森林利用課 山村振興緑化推進室　課長補佐	オブザーバー
宮本 至	NPO 法人 森づくりフォーラム 事務局長	事務局長
石山 恵子	遊学の道 project 代表	事務局
中沢 和彦	NPO 法人 森づくりフォーラム 広報部スタッフ	事務局

「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」報告書
発　行　日　　2023 年 8 月
編集・発行　　「森林と市民を結ぶ全国の集い 2023」実行委員会
事　務　局　　NPO 法人森づくりフォーラム
東京都文京区本郷 2-25-14 第一ライトビル 405
E-mail：tsudoi@moridukuri.jp
編集・校正　　宮本 至、石山 恵子、中沢 和彦
本集いは、「緑と水の森林ファンド中央事業」として実施されました。